

スピードアップの功罪

昨今の世のスピードぶりは目を見張るばかりで、うっかりするとそのスピードに随いて行けなかったり、その過剰さに呆れることもある。社会にスピード化が求められ常態化して、それに行動を合わせるように強制されると、逆に社会生活を脅かされることもある。

モスクワの地下鉄は、市内の隅々まで網の目のように張り巡らされ、いまや一般市民にとっても便利で、生活に欠かせない交通手段となっている。各駅のモダンな設計と美術館のような格調高いインテリアは、世界的にも知られ、モスクワ市民の自慢の種でもある。

ところが、なぜか世上传えられない大きな欠陥がある。それは、駅構内のエスカレーター作動時のスピードである。その速いこと、速いこと。地下深くにあるプラットフォームへ辿り着くまでに、かなりエスカレーターのお世話になるが、だからこそスピードを速めているのかも知れない。案の定エスカレーターの終点では、転倒者が続出して、年寄りほとんど回りの人に支えられて何とか降りられるありさまである。まさに恐怖のエスカレーターである。因みにその速度は、秒速1.6mで、日本の駅施設のそれが通常秒速1mであることを考えれば、その超スピードぶりは推して知るべしである。

モスクワ地下鉄の強引なまでのスピードぶりは、ドアの開閉にも表れている。特に、ドアの乱暴な閉め方は、左右の半扉が火花を散らさんばかりに猛烈にぶつかり合う。余程注意しないと子供なんかドアに手を挟まれたら、骨折どころか、骨が砕けてしまう。乗客は用心してドアの傍には近寄らないし、駆け込み乗車は絶対やらない。推察するに過去に多くの傷害事故があったと思うが、改善されたようにも見えない。自己責任で自衛するより手段はないか。あ～！こわ～っ・・・。

だが、乗客の危険なんか意にも介さず、なぜこれほどまでに過激にスピードアップに励むのか、まったく理解できない。古今東西‘急いては事を仕損じる’と言うではないか。

(近藤)